

## コハクチョウの高圧送電線衝突死

— 邑知瀨の平成14/15年度シーズン、ガンカモ類落鳥死記録 —

沢田 隆

925-0047 石川県羽咋市御坊山町13-5, VYU04102@nifty.ne.jp

### 野鳥の高圧送電線死傷事故の経緯

邑知瀨では、昭和62年頃からコハクチョウの安定越冬が見られ、数の増加に伴い麦芽捕食の農業問題が浮上してきたが、その対策を進める中で野鳥の高圧送電線への死傷事故が明らかになった。

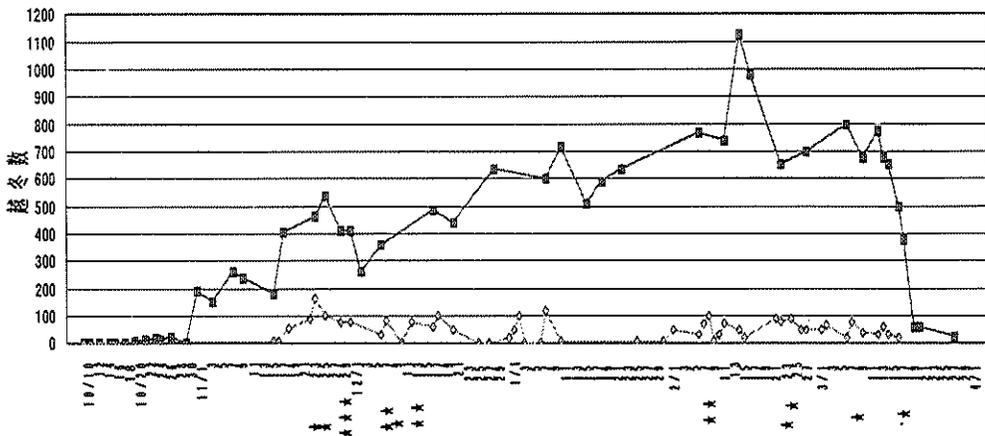
平成元年、地元野鳥保護3団体が相次いで保全策を北陸電力へ要望した。

電力会社は平成2年にカラーリングで衝突防止対策を行ったが、効果は見られず、事故は毎年続き、平成5年度における実績ではコハクチョウ17羽とカモ類多数が死傷している。

平成11年にはグランド線のカラーリングをカラースパイラルロッドに交換したが、事故は減少せず、平成14年度シーズンではコハクチョウ20羽近くが死傷し、カモ類は確認した例を含め推定200±羽が衝突死した。

この間、マガン、ヒシクイやカモメ類、サギ類など多種の野鳥が犠牲となっている。

これまでの事故対策用品は、送電線の着雪、風害防止用品を着色しただけの物で



(★印は送電線に起因する事故と衝突される事故推定日と件数。送電線通過羽数は日視調査含め帰羽数と日中採食羽数からの推定値)

図1. 平成14/15年度におけるコハクチョウの越冬数(上)と送電線通過数(下).

あり、国内の同様被害地域の電力社の野鳥衝突防止対策に見られるフラップやバードレス球のような野鳥専用用品と言えるものではない。地元では本格的な対策の継続を要望している。

#### 平成14/15年度シーズンの事故例

11月中、まれな長雨で湿田状態が続き、送電線付近が採食地の一つとなった。この採食地が埒から近い関係で、送電線下や送電線中を飛翔する個体も多く、22日間でこの採食地を利用する群30~100±羽中で10羽が送電線に衝突、落鳥死した。その後、当湿田で埒が形成され、送電線越えは減少し、事故も確認できなくなった。

2月には好天が続き埒も乾田化して、4~7km隔てた採食地を利用するようになったため、再び送電線越えのときに落鳥死が見られるようになった。

#### 高圧送電線の規格

高圧送電線の規格は、以下のとおりである。

線名：北陸電力能登幹線、送電電圧500KV、4導体。

鉄塔形状：四角鉄塔亜鉛メッキ、一部白赤塗装で航空標識赤色点滅と点灯が有る。

鉄塔の高さ：88.5~119.9m、幅平均：30.5m。

送電線、グラウンド線高さ：最低地上高24m、最高地上高119m。

送電線太さ：外径38.4mm。

グラウンド線太さ：外径21.0mm。

#### 送電線の野鳥衝突防止対策

送電線への野鳥衝突防止対策としては、図に示す位置に各種の標識がつけられた。

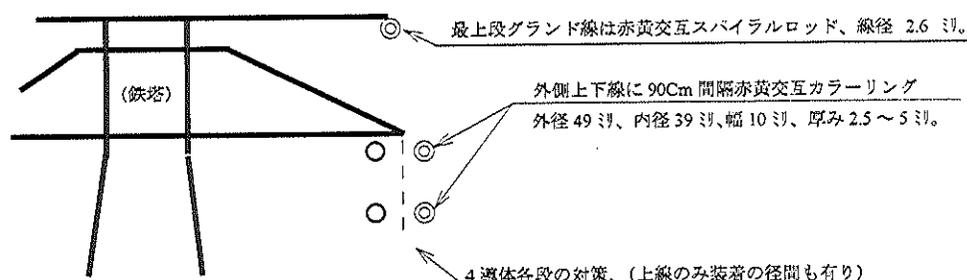


図2. 送電線の野鳥衝突防止対策

#### 鉄塔付近が採食地となった場合の送電越えスタイル

飛翔パターン①：送電線越え時点で採食地の状況が見えない邑知潟における一般的な送電線越えの飛翔の仕方である。途中で上昇して送電線越えをやめ、すでに採食している群を目指し降下を始め、送電線直前で減速やイレギュラーな飛び方を見せ、送電線下や送電線間を通過する飛翔パターンである。

飛翔パターン②：通常の採食地間を移動するときの高度のまま、送電線下を抜る飛翔パターンである。

飛翔パターン③：これも邑知潟における一般的な飛翔スタイルで、送電線を認識し、迂回や旋回飛翔で高度を稼ぎ、グラウンド線を越えるタイプである。

埴へ帰るのは日没後、地平線近くが僅かに薄暮の頃で、送電線越えのときには送電線手前で迂回飛翔したり送電線下を通過した。さらに暗くなり星空になると、飛び立ち声とサーチライトの確認では直線的に送電線を通過したが、グラウンド線の上下関係は確認出来なかった。

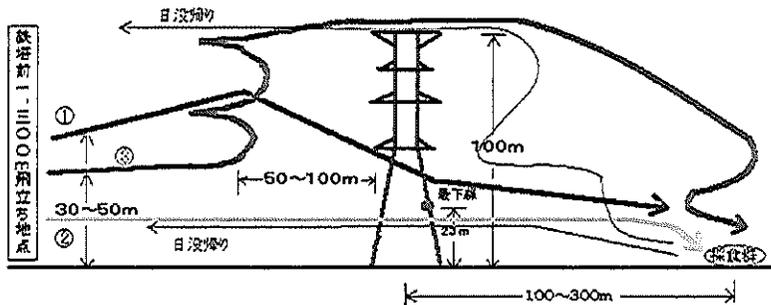


図3. 鉄塔付近が採食地となった場合の送電越えスタイル

## 結論

1. 送電線衝突は事故例からは夜間に集中しており、暗闇でも視認可能な対策が必用である。

2. 日中の送電線越えの場合には、本線に対する回避迂回行動を取る場合が多いが、直線的に送電線を越えるタイプに対し、グラウンド線の視認効果を増す対策が必用である。

謝辞：地元保護団体だけでは、企業の壁は厚く、日本白鳥の会と日本雁を保護する会にご支援頂きました。翌15年、15年目にして初めて野鳥衝突防止対策用品の蓄光式フラップがグラウンド線に設置されました。関係者の皆様方には厚くお礼申し上げますとともに、これからの推移を見守りたいとおもいます。